

# フィリピン 人気のバスケットメン・サッカー、 応援するのはパックマン

鈴木有理佳

## ●スポーツに国情が反映が

フィリピンのスポーツ事情を我々ほどの程度知っているだろうか。今日、有名なフィリピン人選手といえば、プロボクサーのマニー・パッキャオだろう。二〇一五年五月二日（日本時間三日）に、アメリカのフロイド・メイウエザー選手との「世紀の対決」が行われた。また、二〇一四年のソチ冬季五輪にフィリピンから二二年ぶり、ただ一人参加した男子フィギュアスケート選手の健闘が日本でも報道された。

フィリピンのスポーツ事情をみていくと、そこにはフィリピンという国の実情が反映されているように思えてくる。例えばオリンピックでのメダル数をみると、フィリピンはこれまで九つ（銀二、銅七）取っている。競技別ではボクシング五つ、競泳二つ、陸上二つである。最後にメダルを取った

のは一九九六年アトランタ大会で、ボクシング・ライトフライ級の銀メダルだ。世界で活躍するフィリピン選手は個人競技に多く、団体競技は弱いらしい。そんなイメージすらある。

地域をアジアに狭めて、四年ごとに開催されるアジア競技大会のメダル獲得数（金・銀・銅の合計）の順位を調べてみた。すると、フィリピンは初回の一九五一年大会から一九八六年大会までは常に一〇位以内であったが、それ以降は順位を下げ、二〇一四年大会では一八位であった。大会ごとに参加国・地域数が違うため、単純に結論づけることはできない。しかし、フィリピンより人口の少ないタイは、一九六二年大会からずっと一〇位以内を維持しているのがある。フィリピンの順位低下は、一九八六年民主化後の政治的混乱と経済成長の低迷期に重なる。国

力低下がスポーツ界に影響しているのではないかと考えてみても不思議ではない。

もしスポーツに国の実情が反映されるなら、逆にスポーツ事情からその国の状況がわかるのではないか。そこで、次に三つの事例を紹介しよう。いずれも人気があり、メディアでよく取り上げられるバスケットボール、サッカー、それにプロボクサーのマニー・パッキャオ（愛称パックマン）である。

## ●企業グループの戦い

フィリピンで最大の人気競技といえばバスケットボールである。アメリカ植民地下で広まり、一般市民に広く親しまれているスポーツだ。プロリーグも存在し、一九七五年にアジアで最初に設立された。ここで注目したいのは、そのプロバスケットチームの親会社である。全一二チームのうち、三チームは

サンミゲル・グループに所属し、また別の三チームはMVPグループに所属する。後者は香港のファースト・パシフィック社がフィリピンに出資する企業グループで、フィリピン人のマヌエル・V・パギリナン氏が会長として率いていることから、彼のイニシヤルを用いてMVPグループと呼ばれている。実は、この二つの企業グループの総売上高は一位と二位である。おまけに、近年ではインフラ事業の受注をめぐって激しく競合している。つまり、プロバスケットにもフィリピン財界の勢力図がそのまま反映されていることがわかる。

チーム親会社の業種にも注目してみよう。食品・飲料（五社）、通信・電力・運輸・交通などのインフラ関連（四社）、その他化粧品、塗料製造、自動車販売各一社である。食品やインフラ関連は、地場大手が多く活躍している分野だ。なお、自動車販売会社は韓国の起亜ブランドを扱っており、チーム名も「キア・カーニバル」（Kia Carnival）という。

突然だが、ここで時間をプロリーグ設立時の一九七五年に戻す。当時「トヨタ・コメッツ」（Toyota

Comets)、「マリワサ・ノリタケ」(Mariwasa-Noritake Porcelain Makers)というチームがあったことを知る人は現地以外にほとんどいないのではなか (Bulletin Today 一九七五年四月八日付)。

その名のおり、チーム親会社はトヨタ自動車と陶磁器ノリタケを生産する地場企業であった。四〇年前のフィリピンで、「トヨタ」対「ノリタケ」という日本ではみられない試合が行われていたのである。ついでに他のチーム親会社をみると、食品・飲料(四社)、

繊維、家電、小売各一社であった。やはり食品会社が目立つが、一九七〇年代当時のほうが、より製造業らしい企業がプロバスケットに参画していたようにもみえる。日本ブランドを抱くチームもあった。まさに、工業化を進めようとしていた当時の経済状況を反映していたといえるだろう。

### ●選手の大半が海外出身

近年、世界ランキングとともに人気も急上昇しているのがサッカー代表である。チーム名は「アスカルズ」(Azkals)といい、野良犬という意味合いがある。フィリピンにおけるサッカーの歴史も

古い、バスケットの陰でほとんど注目されてこなかった。支援もなく、実力も低迷し、二〇〇五年のFIFA世界ランキングはフィリピン史上最低の一九一位まで落ちた。それでも野良犬のようにしぶとく生きよう、というのがチーム名の由来である。その後、代表チームの再編と国際地域大会などで白星を重ねてきた結果、二〇一五年三月には一二八位までそのランキングを上げた。その時点で東南アジア諸国のなかではトップである。

世界ランキングが上昇した背景には、海外出身のフィリピン系選手を多くスカウトしてきたことがある。彼らの大半は母親がフィリピン人、父親が欧州人で、欧州のクラブでプレーしていた選手達だ。例えば、二〇一四年五月にモルディブで開催されたAFCチャレンジカップの決勝戦におけるフィリピン代表先発メンバー一人のうち、八人はイギリスやドイツ、それにオランダなどの欧州出身者であった。ちなみにこの試合、フィリピンはパレスチナに負けてしまったが、もし勝っていたら、二〇一五年一月にオーストラリアで開催されたAFCアジアカップ

で日本と対戦していたかもしれないのである。なお、彼らのなかにはそのイケメンぶりを発揮し、企業広告などに起用されている選手もいる。そして人気上昇にともない、サッカー代表チームにも大手企業のスポンサーがつくようになった。

フィリピン人口の約一割は海外就労者および移住者である。フィリピン人女性が他国の男性と結婚する例も多い。当然、彼らの子どもの中にはスポーツ選手もいるだろう。そのようなフィリピン系選手に、母国で活躍してもらっているのがアスカルズなのである。海外移住者が多いフィリピン事情があつてこそその代表チームだ。ただし、この方法を続けることがフィリピンのサッカー界にとって良いことなのか、議論もある。

### ●現役プロボクサーは下院議員

プロボクサーのマニー・パッキャオは世界で最も有名なフィリピン人選手である。六階級を制覇し、フィリピンの英雄だ。彼の試合の日はテレビの前で観戦する人が多く、フィリピンのあちこちで仕事が始まる。またイスラーム武装勢力が活動するミンダナオでも、

試合中は観戦のために事件が少なくなるという。

パッキャオはミンダナオ島ブキドノン州の貧しい家庭の出身である。その才能と努力に支えられた実力によって、ボクシングの世界で偉業を成し遂げた。当然、ショービジネスへの露出も高くなり、今度はその知名度を生かして二〇一〇年に下院議員になった。現在はその二期目を務めている。おまけに、アメリカのビバリーヒルズに豪邸を購入したとも報道されており、いまやセレブの仲間入りだ。

実は、スポーツ選手がその知名度を生かして政治家になる例はよくあることだ。国政レベルでは上院議員になったプロバスケット選手が過去に二人いる。地方レベルになると、そうした事例はさらに増える。スポーツ選手であれ、芸能人であれ、知名度の高い人が政治家になるという現象は、フィリピン政治の特徴である。パッキャオのこれまでの道のりは、まさにフィリピン版サクセス・ストーリーを体現している。個人の力で立身出世できる環境がフィリピンにあることを示していよう。

(すずき ゆりか/アジア経済研究所 動向分析研究グループ)